〔論　説〕

欲望の貨幣論と人間論が突きつけるもの
――「経済学史」は何を語り直すべきか――

塚本恭章

「私はこの二冊（――ジョン・メイナード・ケインズの『貨幣論』（一九三〇）と『雇用・利子および貨幣の一般理論』（一九三六）：塚本補記）を通して、私たちが資本主義社会で毎日当たり前に使っている『貨幣』というものが、いかに不思議な存在であるのかということを知るようになりました。**ただ、それと同時に、この二冊の本においても、なぜ『貨幣』が不思議な存在であるのかは十分には解明されていないとも考えるようになりました。**貨幣の存在がどのようにして資本主義経済を不安定的にするかという問題に関する理論化はなされていますが、**貨幣それ自体の存立構造に関しては、十分な理論化がなされていない。そこに、少しでも自分なりの貢献ができればと思い始めたのです**」（岩井克人「経済学を学ぶことの幸運、日本で経済学を学ぶことの使命」、東京大学経友会『経友』No.206、二〇二二年二月号、三七頁、強調は塚本）[1]。

〈目次構成〉

一．待たれる岩井「経済学史」の単著化
二．経済学史における「思考」の基本的対立構造
——「経済学的思考」と「不均衡動学的思考」
三．「貨幣」と「資本主義」をめぐる理論的思考
——純粋に「形式的な論理」で動く貨幣と資本主義
四．アリストテレス「欲望の貨幣論と人間論」を語る
（一）「ポリス」の思想家から「貨幣」と「資本主義」の思想家へ
（二）アリストテレス「貨幣の逆説」とケインズ「合理性の逆説」
（三）人類は「貨幣」と「資本主義」にどう対峙すべきか
五．「経済学史」は何を語り直すべきか
——『経済学の宇宙』再読からの豊かな拡がり

一．待たれる岩井「経済学史」の単著化

岩井克人＋丸山俊一＋ＮＨＫ「欲望の資本主義」制作班著『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』（東洋経済新報社、二〇二〇年三月、以下『欲望の貨幣論』）は、年始の恒例番組「欲望の資本主義」シリーズの「特別編」として放送された「欲望の貨幣論二〇一九」のインタビューが元原稿になっています。私はすでに一般紙で本書への書評を発表しましたが、[2]「名著再訪」を念頭に新たな論点を加味し、あらためて論評してみたいと思います。

本書刊行後、私は本務校での担当科目の「経済学史」や「社会思想史」など講義系科目を中心に、本書を〈テキスト〉として活用してきました。読み直す機会もおのずと多くなり、岩井先生が説かれる「欲望の貨幣論」を「欲望の貨幣論と人間論」として拡充化して再論してみたいと思うようになりました。ここには、岩井先生が古代ギリシャのアリストテレスによる貨幣と資本主義をめぐる先駆的で根源的な思考を高く評価し、現代のケインズはその再来であるとみなしていることにも大きく関わっています。

いうまでもなく「名著」とは、なんど読み直しても「新たな気づき」がある「深読み」できる作品にほかなりません。広く知られている岩井先生の『貨幣論』（筑摩書房、一九九三年）の刊行から三〇年が経つ現在、本書とあわせて『貨幣論』をも読み直す良い機会であると考えました。[3]

岩井先生はこれまでに「不均衡動学」や「貨幣論」、「資本主義論」、そして「会社・法人論」などの学術書を多数刊行されてきました。それらのすべてが主流派の新古典派経済学への理論的批判を主眼としており、それに代替しうる独自の理論構築をなすものです。くわえていえば、岩井先生は一九九五年から東大を定年退任される二〇一〇年までのあいだ、「経済学史」講義を長らく担当されてきました（岩井克人『経済学の宇宙』日本経済新聞出版社、二〇一五年、「補遺」を含む文庫版二〇二一年、第八章）。岩井先生は当該科目においても、主流派「経済理論批判」の成果を生かし、標準的な「経済学史」講義のあり方そのものを精査・批判されているのです。

標準的な「経済学史」は、アダム・スミス『国富論』（一七七六年）の出版によって「科学」としての経済学が誕生し、それ以降の経済学は概して単線的な発展を遂げてきたとみなし、さらにアダム・スミス以前の「重商主義」学説は「科学」としての経済学が確立する以前の「幼稚な経済学的言説」の集まり、かつ「時論的な政策パンフレット」にすぎないものとみなすという二つの「暗黙の前提」が置かれていると、岩井先生は指摘

されています。この指摘はひときわ大きな理論的含みをもっています。というのは、まさに岩井「経済学史」の顕著な独自性こそは、アダム・スミス以前のアリストテレスと「重商主義」学説のなかにすでに見いだされうる「貨幣の逆説」、「貨幣の自己循環論法」そして「利潤の差異原理」を救い出し、それらを「経済学史」の中心に据え置くことにあるからです。逆にいえば、「貨幣」と「利潤」をめぐる上記の二つの「基本原理」は、アダム・スミス以降の古典派・新古典派経済学においてみごとに「抹殺」・「抑圧」されてきたのです。本書『欲望の貨幣論』をあらためて読み直す際には、この側面に対する岩井先生の着眼を明確に念頭に置いておく必要があると思います。

岩井先生は『経済学の宇宙』（第八章）のなかでこう述べておられます。「この『経済学史』の講義は、講義ノートをもとにして、いつか一冊の本にまとめてみたいと考えています」。講義ノートが単著化されれば、岩井先生による主流派経済学への理論的批判が「経済学史＝経済学の歴史」としてどのように体系的に総括されうるのか、その全体像をわれわれは知ることができるのは言うまでもありません。そして岩井「経済学史」講義の全体像は、主流派経済学の理論体系がその根源に抱え込む「貨幣の忘却」から脱却し、「貨幣」と貨幣に基礎を置く「資本主義」をめぐる岩井先生の理論的思考の意義を語り直すことが中核をなすはずです。そのことは同時に、学問としての「経済学」は、「貨幣」と「資本主義」を考え抜くものであるという最も基本的な認識に立ち戻る必要性をも説いているのです。そうなのです。本書『欲望の貨幣論』は、現時点でこのテーマについてもっともコンパクトかつ平明に論じ直した最良の一書にほかならないのです（なお本稿では、岩井理論と岩井「経済学史」の独自の特徴と意義をより明確にするために、『欲望の貨幣論』をベースにしながらも、それ以外の岩井先生の著書や論考も積極的に参照していくことにしたいと思っています）。

二．経済学史における「思考」の基本的対立構造
――「経済学的思考」と「不均衡動学的思考」

岩井先生による「貨幣」と「資本主義」についての理論的思考を語り直す前に、経済学史における「思考」をめぐる基本的対立構造―「経済学的思考」と「不均衡動学的思考」―について簡潔に触れておくのがよいでしょう。実際のところ、これこそがまさに『欲望の貨幣論』において「二つの資本主義観」として概説されている、「新古典派的な資本主義論」と「不均衡動学派的な資本主義論」にみごとに合致しているからです。

岩井先生が「経済学史」を主題に最初に書かれたのは、『ヴェニスの商人の資本論』（筑摩書房、一九八五年）に所収されている「『経済学的思考』について」と題された論考でした。岩井先生がここで呼称されている「経済学的思考」とは、「『見えざる手』が純粋に働いた時に達成される状態を経済の『真実』の姿として規定し、われわれが日々経験している現実の経済の動きをそれの『不完全』なる現れとみなすもの」[4]と定義されています。そしてこの「経済学的思考」の論理的帰結は、「見えざる手」の働きを阻害する「経済外的」要因こそが現実の経済状態に「不完全」なる現れを生み出し、「真実」の姿である均衡状態から乖離させうる、まさに「負」の作用素としてのみ理解される「不純物」にほかならないのです。

アダム・スミスを始祖として、現代のフリードマンらが信奉する「新古典派的な資本主義論」は、「見えざる手」の働きに全面的な信頼を寄せながら、「不純物」を除外し資本主義のグローバルな「純粋化」を究極的に推進させることで、効率性と安定性の同時実現という「理想状態」が達成されると主張するものです。ここでいう「理想状態」は上記の「真実」という言葉に対応しています。しかしながら、こうした新古典派経済学の基本思想の「壮大な実験」としてのグローバル化は、二〇〇八年のリーマン・ショックによって「壮大な失敗」に終わっ

たと岩井先生は結論づけます。[5]

フリードマンらの「新古典派的な資本主義論」をその背後で基礎づけている「経済学的思考」とはまったく対峙し、ヴィクセルの不均衡累積過程理論とケインズの有効需要の理論を「有機的に統合」した岩井先生の『不均衡動学』におけるいわば「不均衡動学的思考」から得られる最も重要な理論的主張のひとつは、資本主義経済においては、効率性と安定性は「二律背反」するというまさに「資本主義の不都合な真実」に直面せざるを得ないということです。本書『欲望の貨幣論』の別の表現でいえば、「自由と安定との二律背反」です。[6] 資本主義を基礎づけ存立させている「貨幣」こそは人間そのものに「自由」を与えますが、岩井先生はそこからさらに進み、貨幣こそが「もっとも純粋な投機」であるという独自の認識を提示されます。貨幣自体が純粋な投機対象である資本主義社会は、必然的かつ本質的に「不安定性」を内包しており、その現実的帰結が貨幣のバブル（恐慌）や貨幣のパニック（ハイパーインフレ）にほかならないわけです。

したがって、本書『欲望の貨幣論』でその最大の先駆者とみなされる重商主義者ジョン・ローから現代のヴィクセルとケインズに引き継がれる「不均衡動学的思考」にもとづく「不均衡動学派的な資本主義論」は、資本主義には「理想状態」など存在しえず、「効率性の増大」は「安定性の減少」に帰結することを説くことになります。逆説的ながら、資本主義がある程度の安定性を備えた経済システムとして存立しているのは、市場の「見えざる手」の働きを阻害するさまざまな「市場の不完全性」としての「不純物」―貨幣賃金の硬直性や政府・中央銀行による規制や諸政策など―があることによってであるという主張を導くことにもなります。[7] 自己利益追求によらない「公共の利益」を意識的に堅持する政府なり中央銀行の存在こそが資本主義が機能するには絶対的に必要不可欠であり、当初は民間銀行だったイングランド銀行が資本主義経済全体の安定性を確保すべく、時代のなかで自生的に「進化」しながら第二次大戦後に「中央銀行」へと転換したという事実を、岩井先生は

とりわけ重要視されているのです。

ケインズ革命に対するフリードマンらの新古典派の反革命は、ヴィクセル・ケインズによる「不均衡動学的思考」を排斥し、「経済学的思考」とそれにもとづく「自由放任主義（的資本主義）」を強化・拡大するものにほかなりませんが、そうした主流派の支配的思考からの「脱却」が現代においていかに困難であるかを「実証」するひとつの試みこそが、みずからの「経済学史」であると岩井先生はいわれます。「自由放任主義」思想は、われわれの想像をこえた強靭な生命力としぶとさをもっているようです。三浦雅士さんとの対談「現代思想としての経済学」（二〇〇七年）のなかで、岩井先生が次のように主張されていることを本節の最後で指摘しておきたいと思います。「いま、経済学においては市場経済を神聖視する新古典派経済学……が強いのですが、そういう主流派的な思考とは違う別の思考がある。そして、その別の流れこそが、経済や政治、さらには社会一般に関するほんとうの思考だとぼくは思っています。その代表がケインズです[8]」。

三．「貨幣」と「資本主義」をめぐる理論的思考
――純粋に「形式的な論理」で動く貨幣と資本主義

一九八〇年代以降の岩井先生による「貨幣」と「資本主義」をめぐる理論的思考から得られるひときわ重要な結論のひとつとして銘記しておかなければならないのは、「貨幣」であれ「資本主義」であれ、それらが純粋に「形式的な論理」によって動いているという理論的認識です（岩井克人・三浦雅士『資本主義から市民主義へ』新書館、二〇〇六年）。では、それはどのような意味内容をもつ「理論的認識」なのでしょうか。

本書『欲望の貨幣論』（第一章）で、岩井先生は「商品の価値」も「貨幣の価値」も「社会が与える」が、

それのみでは「商品」と「貨幣」そのものを根源的に区分しえないとし、さらに考察を進めます。「貨幣の価値は社会が与える」という命題は、マルクス「価値形態論」やメンガー貨幣理論の「到達点であると同時に、その限界点でもある」[9]のです。

商品の価値は、それをモノとして消費する人間の「欲望」（経済学上の概念では「（限界）効用」）という「実体的な根拠」がその価値を究極的に決定するのに対し、貨幣（おカネ）の価値は、世の中のあらゆる人が「貨幣を貨幣として受け取ってくれる」、すなわち「貨幣とは貨幣であるから貨幣である」という岩井先生のいう「自己循環論法」によってその価値が支えられているのです[10]。したがって「貨幣の価値」は、「商品の価値」と違って、人間の欲望という実体的な根拠は存在しないのです（上記『資本主義から市民主義へ』で明確に言及されているように、「貨幣の価値」は「他者の欲望」ではなく、無限に続く「欲望の他者性」によって決定されるといってもよいでしょう）。そして岩井先生はこう明言されています。「この『自己循環論法』こそ、貨幣に関するもっとも基本的な真理です」[11]。

岩井先生が『貨幣論』（筑摩書房、一九九三年）をつうじて独自に展開された、貨幣の貨幣としての価値を支えている「自己循環論法」理論は、ケインズの「美人コンテスト」理論とまさに同型であり、それはさらに「予想の無限の連鎖」として新たに解釈され直されてもいます（ケインズ「美人コンテスト」理論における「美人」とは、まさに「予想の無限の連鎖」をつうじて、究極的には「美人とは美人であるから美人である」という「自己循環論法」の産物として規定されてしまうからです）。いずれにせよ、それは従来の支配的な貨幣学説である「貨幣商品説」と「貨幣法制説」（および後者に全面的に依拠しているＭＭＴ＝現代貨幣理論）をともに退けるものにほかならず、そうした貨幣の「自己循環論法」の理論的な先駆者こそが重商主義者であり「お尋ね者」ジョン・ローであったのです。

次は、「資本主義」についての岩井先生の理論的思考です。ジョン・ローと同じく重商主義者のトーマス・マンが、すでに商業資本主義のなかに見いだしていた、地理的・空間的に異なる二つの価値体系のあいだの差異を媒介することで利潤を生み出すという「差異から利潤を生み出す」という原理は、商業資本主義のみに限定しえず、あらゆる資本主義の諸形態に妥当し共通する「資本主義の基本原理（利潤の差異原理）」にほかならないと主張されています（この点についてのより詳細は、『資本主義を語る』講談社、一九九四年、第一章、『経済学の宇宙』第四章など）。「利潤」というものが永続的に創出されていく資本主義的経済メカニズムを、まさに「資本主義の純粋理論」として構築しようとしたのがシュンペーターでした。

岩井先生によれば、シュンペーターの「イノベーション（革新）」理論こそ、「差異」そのものを意識的に生み出し続けていかねばならない、「産業資本主義」後の「ポスト産業資本主義」の理論であり、ポスト産業資本主義とは「資本主義の基本原理」が最も純粋に貫徹されうるところの「最も純粋な資本主義の形態」にほかならないのです。人間労働（剰余労働）や限界効用・限界生産力といった経済の実体的な根拠から「利潤」の創出を説明してきた新古典派経済学やマルクス経済学と根源的に対峙し、シュンペーター理論とそれを理論的に精緻化した岩井先生の「シュンペーター経済動学」はそうした実体還元主義を棄却し、「利潤」とは「差異」性から生み出されるのであり、そしてまた、その利潤を生み出す「差異」とはなんら実体的な根拠をもたず、絶えず模倣されながらさらに絶えず新たな差異が生み出し続けていくという、いわば無限に続くところのダイナミックな永久運動をなしていることに資本主義論の核心をみるのです。

貨幣によってあらゆるモノの経済的価値は一元化されます。そして、いうまでもなく「利潤」は「収入－費用」であり、収入と費用は「足し算」によって算出され、前者から後者を「引き算」すれば「利潤」が算出できます。ということは、「資本主義とは、まさに『足し算』と『引き算』だけで動いているシステム」[12]なのであり、

七一

この最も単純な算術のみを行動原理として動く資本主義は、だからこそ「普遍的な」システムであり、それは必然的に「グローバル化」することになると説かれることにもなります。

以上の概観からすでにあきらかでしょう。資本主義を基礎づけている貨幣というものの価値は貨幣の「自己循環論法」に支えられており、また他方で、資本主義における利潤の源泉は「差異性」であり、「差異が利潤を生み出す」わけです。繰り返しになりますが、岩井先生によれば、前者は「貨幣に関するもっとも基本的な真理」であり、後者もまた「資本主義の基本原理」にして、資本主義そのものを支え規定している「普遍的な原理」とみなされています。いずれもが、人間の欲望のような実体的な根拠（実体還元主義）にけっして依拠せず、それとはいわば独立に、貨幣も資本主義も純粋に「形式的な論理」によって動いていることになります。

こうした岩井先生の貨幣論と資本主義論の独自性はきわめて大きな意義と射程をもっていますが、では、これと『欲望の貨幣論』という本書の表題とはどう関連しているのでしょうか。私は本書を『欲望の貨幣論と人間論』として拡充的に捉え直してみたいと冒頭で述べています。ここでは次のようにだけ記しておきます。それ自体は人間の欲望のような実体的な根拠に依存することなく、純粋に「形式的な論理」で動いている貨幣と資本主義そのものが、実際のところ、貨幣とそれに基礎を置く資本主義というものに対する人間の「実体的な欲望」の根源的構造の転換―人間の貨幣への「無限の欲望」とそれに突き動かされた「貨幣の無限の増殖」としての資本主義―を生み出すことになり、さらに、貨幣と資本主義の「形式的な論理」の普遍化と現代のグローバル化のなかで人間の「実体的な欲望」はいっそう増殖させられているということです。いうまでもなくこうした世界では、古典派・新古典派が中核に据えた「古典派の二分法」と「セイ法則」は完全に破綻しており、まさに「自由と安定との二律背反」が色濃く厳然と支配しています。二〇世紀のケインズは、こうした問題群に真正面から挑んだ経済学者でした。岩井先生が『欲望の貨幣論』において、「この四〇年間、貨幣に関して

考えれば考えるほど、その偉大さが見えてくるようになりました[13]」という人物こそがアリストテレスなのです。

四．アリストテレス「欲望の貨幣論と人間論」を語る

アダム・スミスによる「科学」としての経済学の誕生以降、現代の主流派経済学がいまなお抱え続けている大きな理論的難問は「貨幣の忘却」であり、それはおのずと「人間の忘却」にも帰結しうるでしょう。逆にいえば、「科学」としての経済学は、「貨幣の忘却」と「人間の忘却」という対価のうえに成り立っているにすぎないのです。この「貨幣」と「人間」を有機的につなぐキーワードのひとつこそが「欲望」であり、アリストテレスの「欲望の貨幣論と人間論」は、現代のグローバル化された「欲望の資本主義」に最も先鋭的な形で突き付けられている困難の所在を最初に洞察するものでもあったのです。では、なぜ古代人のアリストテレスにそうした「思考」が可能だったのでしょうか。

リチャード・シーフォードというイギリスの古典学者による研究成果に大きな触発を受けた岩井先生は、古代人のアリストテレスが「貨幣」と「資本主義」について最初に深く思考することができ、さらにそれらが最も根源的な思考ですらあったのは、紀元前六世紀以降のギリシャ社会がまさに全面的に「貨幣化」された「近代社会」であったからだと強調されています。『欲望の貨幣論』終章の第四章（や『経済学の宇宙』第八章）を読み直すと、岩井「経済学史」の出発点にアリストテレスの「貨幣」と「資本主義」をめぐる思考が据え置かれていることの意味がよく理解できます。

（一）「ポリス」の思想家から「貨幣」と「資本主義」の思想家へ

アリストテレスは、「他者とともに善く生きる」という目的を最高度に実現しうる「最高の共同体」であるポリスについて思考した「ポリスの思想家」でした。その思考の帰結は、自然（本性）によって「言語」を与えられている「人間は自然（本性）によってポリス的動物である」という、人文社会科学のなかで最も有名な言葉のひとつとして集約されています。「ポリスの思想家」であったアリストテレスが最も深くポリスについて考え抜いたことによって、彼が「ポリスの思想家」を超えて「貨幣の思想家」さらには「資本主義の思想家」にもなったこと、このことにこそアリストテレスの〈真の偉大さ〉があるのだと岩井先生は主張されています。そしてその「真の偉大さ」は、二一世紀という現代のグローバル化された資本主義のなかでよりいっそう大きな輝きを放つことになるのです。

アリストテレスによれば、「最高の共同体」であるポリスでは、「必然的に〈貨幣〉の使用が工夫されるに至った」わけですが、それは現代経済学の表現でいうならば、物々交換にともなう「欲求の二重の一致」を解消する「一般的交換手段」であり、あらゆるモノやサービスの価値を通約可能とする「価値尺度機能」をもつ「貨幣」が必要不可欠となることを意味しています。しかしながら、ただ単に交換手段や価値尺度という観点からの貨幣把握のみであれば、現代の主流派経済学のテキスト内容となんら変わりません。「他者とともに善く生きる」ポリスの存立と維持のためにいまや必要不可欠な「手段（媒介物）」となった貨幣による交換が拡大化していくと、その「手段」は次第に「貨幣それ自体を目的とする」事態（貨幣それ自体の蓄積）へと逆転するようになり、それは「商人術」という「貨幣が交換の出発点であり、終極目的でもある」経済活動に必然的かつ不可逆的に帰結していくことになるとアリストテレスは説くのです。アリストテレスのいうところの「商人術」とはまさに「資本主義」であり、その「資本主義」とは「貨幣の無限の増殖」を求める経済活動にほかなりませ

ん。彼の「貨幣」への思考が「資本主義」への思考ともなったのです。

こうしたアリストテレスの「思考」において、ひときわ興味深く重要視しなければならない論点は、「手段」としての貨幣が「目的」としての貨幣へと転換するその契機をめぐる、いわば「欲望の人間論」です。その契機に関わって、アリストテレスの思考をふまえて岩井先生はこう述べておられます。「人間とは『可能性』それ自体を『欲望する』ことができる存在であるからです」[14]。すなわち貨幣こそはこの世に存在する（そしてまたこれから将来においてこの世に存在するであろう）あらゆるモノやサービスを入手できる「可能性」を人間に与えてくれる存在なのであり、上記を敷衍していえば、その「可能性」というものを、「あたかもそれ自体が一つのモノであるかのように欲望することができる存在」こそが人間であり、「それは人間だけに可能な『欲望』なのです」[15]。そしてさらに人間は、貨幣に対してまさに「無限の欲望」をもってしまう存在ですらあるのです。アリストテレスは「貨幣」をめぐる思考とともに、「欲望の人間論」をめぐる最も本質的で根源的な特質と構造をすでにはっきりと見抜いていたのです。

アリストテレスによるこうした透徹した洞察が、モノへの欲望の否定としての貨幣への積極的欲望を強調した二〇世紀のケインズによる「流動性選好」という概念に合致していることはあきらかでしょう。それは貨幣と実体の二分法という伝統的思考様式（古典派の二分法）を棄却するものでもあります（岩井先生は別の論考で、「流動性」としての貨幣に対して新古典派的な「選好」という表現を与えたケインズの「流動性選好」という概念には、ケインズ自身の大きな「悪意」があるとも指摘されています）[16]。モノとしてはほとんどなんの価値もないいわば「無」としての貨幣が、逆説的ながら、あらゆるモノやサービスを入手できる「可能性」を人間に与えることによって、人間は単なる交換のための手段・媒介であり、他のモノの価値表示をするにすぎない貨幣に対して「無限の欲望」をもつことになり、それこそが「貨幣の無限の増殖」を求める資本主義を生み出

しているのです。資本主義社会においては、「貨幣（おカネ）とそれ以外のモノ」とのあいだの関係とともに、「ヒトとモノ」との関係が重要であると岩井先生はいわれます。[17] 貨幣論やその後の会社・法人論での研究をふまえての認識ですが、こうしてみると、アリストテレスや現代のケインズは、「貨幣（おカネ）とヒト（人間）」（そして両者を媒介する「欲望」）との関係に鋭く着眼しながら深い思考を重ねたといえるのではないでしょうか。

（二）アリストテレス「貨幣の逆説」とケインズ「合理性の逆説」

岩井先生が「人類史上最大の発見の一つだと思っています」[18] と強調されているのが、アリストテレスが見いだした「貨幣の逆説」です。

ポリスの存立と維持の可能性のために「貨幣」は必要不可欠であるとアリストテレスは説きましたが、その「貨幣」それ自体がポリスそれ自体を崩壊させる可能性があるというのです。「貨幣」の存在こそが「貨幣の無限の増殖」を求める「資本主義」をポリスの内部に必然的に生み出し、さらにそのことは、ポリスと資本主義という全面的に対立しあうはずの二つのシステムのあいだに「不可逆的」かつ「逆説的」な相互依存関係をも生み出すことに帰結しうるからです。古代ギリシャのアリストテレスによるこうした「貨幣の逆説」は、実際のところ、現代のケインズの経済学とそれを新たに再構築した岩井先生の「不均衡動学」から得られる最も重要な理論的テーゼのひとつである、「効率性と安定性の二律背反」ないしは「自由と安定との二律背反」の先駆をなすものであると同時に、だが、その人類史的意義・射程はけっしてそれにとどまるものではありません。

その理由を考えてみる際に有益だと思われるのが、『欲望の貨幣論』第二章で言及されている「合理性の逆説」というテーゼとの比較です。フリードマンが主張したような個々の投機家らの非合理性によって市場が不安定になるのではなく、それとは全く反対に、ケインズが提起した「美人コンテスト」投機理論が的確に把握した

ように、「個人の合理性の追求が社会全体の非合理性を生み出してしまう」のであり、したがってまさに「市場には本来的に不安定性がつきまとうことを主張する理論」がここでいう「合理性の逆説」にほかならないのです。いうまでもなくそれは、フリードマンとその始祖であるアダム・スミスによる「見えざる手」の思想と「真っ向から対立する理論」でもあります。「見えざる手」の理論が想定する予定調和的な世界でも「ヴィクセル的な不均衡累積過程」の理論が支配する全面的に不安定的な世界でもなく、「絶望する理由も満足する理由もないような中途半端な状態」こそが、資本主義経済という「われわれの経済に割り当てられた通常の運命なのだ」とケインズは主張しているわけですが（引用は『経済学の宇宙』第三章）、こうしたケインズ自身の主張を支えているところの「効率性と安定性の二律背反」ないしは「自由と安定との二律背反」という理論的認識を、アリストテレスの「貨幣の逆説」はよりいっそう鋭くかつ深く推し進めるものだと考えられるのです。

あえて簡潔に述べるならば、ケインズの「合理性の逆説」は、あくまで人間の「合理性の追求」が「市場の不安定性」を増大させることを説くテーゼであるのに対して、アリストテレスのいう「貨幣の逆説」は、人間による「貨幣の無限の追求」がその貨幣によって存立する可能性をもつ「ポリスの崩壊」という可能性、そして現代のグローバル化した世界史的な文脈でいえば、貨幣によって存立する可能性をもつ「資本主義それ自体の崩壊」という可能性を引き起こしてしまうことを説くテーゼだからです。アダム・スミスとそれ以降の古典派・新古典派経済学が、貨幣についての思考を「忘却」するものであったことはすでに言及しておきました。ケインズは「貨幣の忘却」から脱却する経済理論を構築し、その経済理論は明確に「貨幣の思考」を復活させるものでした。人類があらためて再発見しなければならないのが「貨幣の逆説」であり、岩井先生がそれを「人類史上最大の発見の一つだと思っています」と宣言されるのは、「貨幣の逆説」が実際のところ、人類史上「一度も解決されたことがない」からではないでしょうか。「貨幣」と「資本主義」をめぐるアリストテレスのもっ

とも根源的な思考とは、もっとも解決困難な思考を発見するものでもあり、その「解決」のためには、経済学という範疇はゆうに超えているのです。

（三）人類は「貨幣」と「資本主義」にどう対峙すべきか

私はすでに発表された本書『欲望の貨幣論』への「書評」に、「貨幣をめぐる経済思想史を凝縮」というメインタイトルを付けておきました。実際のところ本書からは、「貨幣」というもの、そして「貨幣」に基礎を置く「資本主義」というものについての多くの理論的思考とそれに対する岩井先生の批判的思考を学ぶことができます。「貨幣」についての思考は、大きく四つに区分することができると思います（なおすでに概説されたように、「資本主義」については、「新古典派的な資本主義論」と「不均衡動学派的な資本主義論」という二つの対立概念に区分されています）。

（一）**貨幣の忘却**……アダム・スミスは、重商主義者が見いだしていた貨幣についての思考、そしてジョン・ローが先駆的に見いだしていた「貨幣の自己循環論法」を抑圧した。こうした「貨幣の忘却・抑圧」にもとづくスミスの「見えざる手」の理論は自然法思想を信奉するものであり、それを中核に据え置くスミス以降の古典派・新古典派経済学は、その論理的帰結として、自由放任主義的な経済理論を生み出すことになった。アダム・スミスの自由放任主義思想はミルトン・フリードマンやハイエクらによって現代的に復活されたが、自由放任主義は理論的な誤謬である。

（二）**貨幣の廃絶**……カール・マルクスは、「貨幣はレヴェラーズ（平等派）」であるという正鵠を射る貨幣の

見方を提示した。貨幣についてのこの見方は、貨幣が人間に「匿名性」を与えるとともに、近代以前の共同体的束縛から人間を切り離し、その意味でまさに近代社会における人間の「自由」に基礎を与えていることをも明確に指示している。マルクスは究極的には「貨幣の廃絶」をめざす社会主義社会を標榜していたが、価値形態論の展開をつうじて、その意図に反して「貨幣の必然性」を証明してしまうことになった。それはマルクスに関する最大の逆説をなすものである。

（三）**貨幣の競争**……フリードリッヒ・ハイエクは、『貨幣発行自由化論』において、国家や中央銀行による貨幣発行の独占化を批判し、民間企業による貨幣発行の自由競争を推進させることを提起した。「分散化」された仮想通貨ビットコインはこうしたハイエク理論にもとづいている。だが自由放任主義的なビットコイン資本主義では、貨幣こそが純粋投機の究極形態であることから必然的に生じうる貨幣のバブルやパニックを回避し、私的な利潤動機ではなく公共的な観点から資本主義社会全体の安定性のために機能する経済主体がまったく存在しないので、それは不可能である。

（四）**貨幣の逆説**……すでに詳述されたように、古代ギリシャのアリストテレスは、ポリスの存立を可能にする貨幣それ自体が、ポリスそれ自体を崩壊させる可能性を生み出してしまうという貨幣についての根源的で不可逆的な「貨幣の逆説」を発見していた。こうした「貨幣の逆説」がグローバルな規模で再発見されつつあるのは、資本主義の存立を可能にする貨幣それ自体が資本主義それ自体を崩壊させる可能性を生み出してしまうことである。アリストテレスの「貨幣の逆説」は、市場の不安定性を説くケインズの「合理性の逆説」以上に、より深く大きな人類史的意義をもつ。

岩井先生はアダム・スミスやマルクス、ハイエクらによる経済学の歴史における理論的貢献やみずからへの知的影響力をはっきりと認めながらも、とりわけ「貨幣の忘却」、「貨幣の廃絶」そして「貨幣の競争」についての彼らの主張をすべて棄却し、「貨幣の逆説」と「合理性の逆説」を見いだしたアリストテレス、ケインズ両者の「思考」をこそ高く評価し、そして継承しなければならないという立場であること、この点だけはあらためて確認しておくのがよいでしょう。次の二つの文章は上記の内容を端的に表明しているのです。「自由放任主義者も社会主義者も、ともに貨幣に関して十分に思考しなかった」のであり、「自由と安定とが二律背反の関係にあるというこの認識は、現在、ますます重要になっています」[19]。

アリストテレスが発見した「貨幣の逆説」をふまえながら、はたして人類は「貨幣」と「資本主義」にどう対峙していけばよいでしょうか。岩井先生の理論的思考から最初に学ばなければならないのは、「貨幣」と「資本主義」というものがいったいどういうものであり、それらはどう動いているのかを「正しく理解する」ということです。「貨幣の自己循環論法」と「利潤の差異原理」に対して、岩井先生はそれら各々が貨幣に関する「もっとも基本的な真理」であり、資本主義に関する「基本原理」と呼称し、位置づけられていたことをあらためて想起する必要があります。さらに貨幣にせよ資本主義にせよ、それらは純粋に「形式的な論理」で動いており、そのグローバルな「普遍化」がいっそう深化してきている以上、それらに対抗する原理もまた「普遍性」をもったものでなければならないのです。岩井先生は、純粋に「形式的な論理」に対抗できるのは、唯一、純粋に「形式的な倫理」としてのイマヌエル・カントの道徳律のみであると主張されています。岩井先生の貨幣論・資本主義論との理論的整合性はもちろんのこと、さらにそこでの倫理論と人間論はその理論的水準のいわば同格的なものが要請されているのではないかと考えられます。三浦雅士さんとの対談集『資本主義から市民主義へ』(新書館、二〇〇六年)は、「貨幣論」からはじまり「人間論」でおわっているのも何か示唆的に感じられます。

以上でみてきたような重要論点について、本書『欲望の貨幣論』においては最後に簡潔に言及されるにとどまっていますが、資本主義経済における「会社・法人論」研究からさらに「信任関係」論の研究へと到達するなかで、岩井先生はアリストテレスの「他者との関係における善」をよりよく実現しうる信任関係論に基礎を置く「倫理的な資本主義」の再構築をめざされているのです。経済学の領域をゆうに超えて、経済学と法学と倫理学との有機的接合を深く思考する岩井先生の学問は、「貨幣の逆説」に普遍的に対抗すべく、まさに人類史的な挑戦にほかならないのです。

五．「経済学史」は何を語り直すべきか
――『経済学の宇宙』再読からの豊かな拡がり

経済学史は、経済学の「歴史的な発展」や競合する経済諸学派の「多様な関係」をあきらかにすることだけを目的としているわけではありません。本書『欲望の貨幣論』、そして『経済学の宇宙』の再読からあらためて何がいえるでしょうか。「経済学史」は何を語り直すべきでしょうか。

一つは、何度も論じてきたように、学問としての経済学と経済学史において、「貨幣」と「資本主義」が最も重要な論点であり、それらについての理論的思考こそが、むしろ経済学や経済学史のあり方そのものを規定することになるということです。またその「理論的思考」というものは、既存の経済学（史）の全体において、「貨幣」と「資本主義」がどのように理解され、位置づけられてきたのかをめぐるいわば「経済学の宇宙」への批判的思考をも含むものでなければなりません。岩井理論にもとづく岩井「経済学史」こそは、そうした「批判的思考」のひときわ重要な試みの一環をなしているのです。理論家による「経済学史」の特筆すべき独自性と

いえます。すでに述べておいたように、近代経済学にせよマルクス経済学にせよ、既存の経済学史の方法が共通して抱える「二つの前提」を踏襲し続ける限りにおいて、経済学史という専門分野の衰退とともに、いわゆる「経済学史否定論」には立ち向かうことはできないと岩井先生は主張されています。岩井「経済学史」こそはそうした「前提」から脱却し、既存の経済学史の方法を「相対化」させ、「経済学史否定論」を「経済学史積極論」へと転換させうる、経済学史の新たなあり方を提示するものなのです。

二つめは、上記にある「批判的思考」という論点と密接に関連していますが、経済学（史）における「思考」の基本的な対立構造を析出・抽出することで、批判される側の「思考」の特質とその誤謬性をより厳密に明確化する必要性があるということです。岩井先生の場合、「経済学的思考」に対して「不均衡動学的思考」が対峙され、「貨幣の忘却」に対して「貨幣の逆説」が対峙されており、さらには、実体還元主義にもとづく「貨幣商品説」と「貨幣法制説」、「新古典派的な資本主義論」と「マルクス派資本主義論」およびその「利潤論」に対して、純粋に「形式的な論理」で動く貨幣と資本主義についての「もっとも基本的な真理・原理」である「貨幣の自己循環論法」と「利潤の差異原理」、そして「不均衡動学派的な資本主義論」を対置させる、というようにです。ケインズの経済学と岩井先生の「不均衡動学」が導きだした理論的テーゼ「自由と安定との二律背反」と「効率性と安定性の二律背反」の重要性を理解し損ねた、自由放任主義と社会主義という両極端に位置するイデオロギーが二一世紀において棄却されていることはいうまでもありません。それらの問題は同根なのです。

岩井先生の『経済学の宇宙』には、アリストテレスと重商主義学説について、次のような注目すべき文章が記載されています。貨幣と資本主義についての最初の思想家となったアリストテレスについて、「あえて『最初』という形容詞を使ったのは、アリストテレスが貨幣に関して最終的な解答を与えたのでも、資本主義について

の究極の理論を打ち出したのでもないことを、強調しておくためでした[20]。そしてアリストテレスが未解決のまま残していた、資本主義における「貨幣の価値」と「利潤の創出」をめぐる二つの問題が、実際のところ、「一七七六年にアダム・スミスが『国富論』を出版するはるか以前に、理論的な解決が与えられていたこと」を、岩井先生はあらためて「発見」されるわけです。もちろん、アダム・スミスに先立って「理論的な解決」を与えていたのが「重商主義者」です。「貨幣の価値」についてはジョン・ローが、「利潤の創出」についてはトーマス・マンという重商主義学説のなかにその「理論的な解決」が見いだされうるのであり、それは「貨幣の自己循環論法」と「利潤の差異原理」として岩井先生自身の研究によって、さらにいっそう理論的に精緻化されています。岩井先生のケインズ・シュンペーター研究は、まさにこうした理論問題に対する「新たな精緻化・定式化」のために「読み直される」のであり、ここにもまた、岩井先生による「批判的思考」とそれをふまえた新たな「理論的解決」にもとづく経済学史という顕著な独自性があると思います。

最後の三つめは、標準的な経済学史の領域をこえうる内容であり、岩井先生による「経済学史」講義プロットの「終章」が、「貨幣・法・言語と人間」とされていることに主に関わっています。「言語・法・貨幣論」は岩井先生が新たに再構築されようとしている「第三の科学」としての「人間科学」の中核をなすものであり、「言語・法・貨幣」こそは、まさに自己循環論法の産物によって成り立っている「社会的な媒介」にほかなりません。岩井先生は『経済学の宇宙』で次のように述べておられます。「言語と法と貨幣とは、……人間社会に支えられながら、同時に人間社会を支える実在という二重の意味で、社会的な実在であるのです[21]」。では、なぜ最後の「終章」において、それまでの講義内容とはやや異なる印象を与える「貨幣・法・言語と人間」というテーマが設定されているのでしょうか。

しかし上記で述べられたように、経済学における「思考」の基本的な対立構造からみれば、そのことはむし

ろ必然的ですらあるといえるのではないでしょうか。「貨幣・法・言語と人間」は、より簡潔にいえば「媒介と人間」です。たとえば貨幣は、まさに人間と人間のあいだの交換関係を形成しうる社会的な「媒介」であり、その「貨幣」という「媒介の忘却」というアダム・スミス以降の主流派経済学における理論的思考の欠陥は、おのずと「人間の忘却」に帰結しうることになります。貨幣という媒介が、貨幣のパニックというハイパーインフレによってその価値が崩壊することになれば、そのことは同時に人間社会の崩壊そのものなのです。『貨幣論』でも次のように述べられています。「ハイパー・インフレーションとは、……貨幣の存立構造を危機におとしいれ、その貨幣の媒介によって維持されている商品世界そのものを解体させてしまう事態なのである[22]」。

一つめの指摘に立ち戻っていえば、学問としての経済学は、「貨幣」とそれに基礎づけられた「資本主義」によって規定されうる存在です。貨幣という社会的な実在である「媒介」を思考することこそ、経済学の最も重要な目的と使命のひとつといえるはずです。それゆえ経済学史は、既存の経済学における「思考」のあり方を総合的かつ内在的に解剖する役割を担っており、その意味でも、「終章」をなす「貨幣・法・言語と人間」というテーマこそは、じつは「終章」というよりは岩井「経済学史」講義の全体をつらぬき、そのあり方そのものを規定する「起点」なのです。『資本主義から市民主義へ』における岩井先生の主張が参考になるでしょう。「ぼくが昔からずっと貨幣や法や資本主義について考えたり論じたりしていることのいちばん究極の動機というのは、社会科学、もっと広くいえば人間科学というとき、なぜそこに科学という名称がつくのかということを明らかにしたいということです。なぜ人間科学は科学であるのかということです[23]」。

最後に、次のような岩井先生による理論的思考のエッセンスを再論して本稿を締めくくりたいと思います。「貨幣」とは、有限なモノやサービスの効率的な配分問題を扱う伝統的な経済学における有限世界の論理を超

越した、まさに「無限世界の論理」に従う存在であり、ジョージ・ガモフの著書にならっていえば、「無限世界のお客」にほかなりません。貨幣についてのこうした基本認識は、岩井先生による貨幣の「自己循環論法」を、「予想の無限の連鎖」として新たに再解釈したときの思考の源泉です。「おカネのおカネとしての価値」は必ず「おカネのモノとしての価値」を上回っていることにより（岩井先生は『欲望の貨幣論』第一章で、これをおカネについての「基本定理」とよばれています）、いわば「無」から「有」を生み出す魔訶不思議な存在として、「貨幣」は語り直されているのです。

さらに「貨幣」そのものがまさに「純粋投機」の究極形態であることによって、資本主義は根源的で必然的な「不安定性」を内包する社会機構なのです。[24] また資本主義は、「差異性」からしか利潤を生み出しえないのであり、最も単純な算術という行動原理にのみしたがう資本主義は、グローバルな「普遍性（多元的普遍性）」をもつ社会機構でもあるのです。そしてさらに、資本主義における「法人（会社）」が、ヒトとモノとの両面をもつ「二階建て構造」論をなしている理論的帰結として、資本主義は、まさに本質的な「多様性」をもつ社会機構にほかならないということです。

貨幣というものを中核に据え置くことで存立しうる資本主義は、こうした「不安定性」と「差異性」と「普遍性（多元的普遍性）」と「多様性」という各々の特質のダイナミックな絡み合いのなかで存立しており、岩井先生がつねに強調されているように、この世における魔訶不思議な存在である「貨幣」と「法人（会社）」同様に、「資本主義」もまた、逆説的できわめて不思議な魅力をもっているのではないでしょうか。本書『欲望の貨幣論』や『経済学の宇宙』をじっくり読み直してみたとき、語り直された岩井先生の長年の理論的思考から、そう私は強く感じます。経済学という学問の面白さと難しさと深さと、そして凄さといっしょに、です。

これからも岩井先生の本書『欲望の貨幣論』は、私の担当科目の〈テキスト〉として活用し続けていきたい

と思っています。本稿が本書に触れることになる学生諸君に何らかの指針を与えうることを願っています。

注

（1）当該文章は、東京大学経済学部創立百周年記念式典講演からのものです。

（2）書評の初出掲載は「週刊読書人」二〇二〇年五月二二日号、第三三四〇号三面です。二〇二三年九月五日刊行の拙著『経済学の冒険――ブックレビュー&ガイド100』（読書人）の第一章においても当該書評を所収しています。

（3）岩井先生が「貨幣とは何か」という問題について、数学モデルを構築して初めて明確な定式化を与えたのが、「貨幣の進化――貨幣経済学のサーチ理論的基礎」という論文でした（その後、一九八八年のペンシルベニア大学のディスカッションペーパーになったものです）。こうした一連の貨幣についての研究動向は、岩井先生の『経済学の宇宙』（第五章）をぜひ参照してください。「貨幣」についての岩井先生の数学モデルは「貨幣交換のサーチ・モデル（search model）」と呼ばれるものです。「貨幣とは何か」（岩井［一九九〇］）で岩井先生は、みずからは貨幣の最も重要な機能はそれが交換手段として使用されることにあると述べられています。のちの本稿で、アリストテレスが見いだした「手段」としての貨幣が「目的」としての貨幣へ転化するという論拠の解説がなされますが、貨幣が「一般的な交換手段」ないしは「交換の一般的媒介」であるからこそ、貨幣そのものを目的化する動因が生み出されるのであり、そこにはいわば貨幣の機能をめぐる不可逆的な因果関係が伏在しているのではないでしょうか。したがってここに、岩井先生が「交換手段」をこそ貨幣の最も重要な機能とみなす理由があると考えられます。『貨幣論』（筑摩書房、一九九三年、一六〇頁）でケインズの「流動性選好」の特質に論及しながら、岩井先生が次のように述べられている点にも注目しましょう。「貨幣がまさに一般的な交換の媒介でしかないことが（そして一般的な交換の媒介であるかぎりにおいて）、貨幣にその実体性とはまったく独立な流動性という名の有用性のごときものをあたえてしまうことになるのである」。なお「貨幣交換のサーチ・モデル」の簡潔な説明とそこから引き出されうるさまざまなインプリケーションについての興味深い諸考察は、岩井［一九九〇］が大変有益な参照文献です。

（4）岩井克人『ヴェニスの商人の資本論』筑摩書房、一九八五年、一五二頁。

（5）岩井克人他『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』東洋経済新報社、二〇二〇年、八八頁。

（6）同書、二五頁。

（7）たとえばこの点については、岩井先生のかつての論文「マクロ経済学とは何か――市場不均衡とマクロ経済現象――」（鬼

塚雄丞・岩井克人編『現代経済学研究―新しい地平を求めて』東京大学出版会、一九八七年に所収）を参照してください。「ケインズ派」の経済学とジョン・メイナード・ケインズ自身の経済学の違いは、「ヴィクセル」的分析を経由してのこうした逆説的認識を堅持していたことにあると主張されています。

（8）岩井克人・三浦雅士「大航海インタビュー 現代思想としての経済学（特集ケインズ／ハイエク）」、『大航海：歴史・文学・思想』新書館編、二〇〇七年、八六頁。

（9）岩井克人他『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』東洋経済新報社、二〇二〇年、四三頁。

（10）岩井先生の「貨幣の自己循環論法理論」からすれば、鋳貨であろうと紙幣であろうと、あるいは現代のエレクトロニック・マネーであれ、「貨幣として社会的に認められていさえすれば貨幣としての機能をはたすことになる」のです。それに続けて岩井先生は同じく『貨幣論』（筑摩書房、一九九三年、六五頁）において、「貨幣という存在はその商品としての価値が希薄になればなるほど貨幣としての純粋性を増していく」とも主張されています。本書『欲望の貨幣論』の冒頭では、「貨幣」の研究を開始したのは一九八〇年代初め頃で、それから四〇年近く経ていますが、「その間、私の貨幣論はまったく変わっていません」と述べられています。変わったのはまさに「資本主義社会」のほうであり、岩井先生は「資本主義社会」がみずからの『貨幣論』で描いた理論的な世界にどんどん近づいてきたと主張されてもいるのです。冒頭にある、「現実が理論に追いついた」という事態そのものにわれわれは注視しなければなりません。

（11）岩井克人他『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』東洋経済新報社、二〇二〇年、四七頁。

（12）同書、一五七頁。

（13）同書、六六頁。

（14）同書、一三四頁。

（15）同書、一三四頁。

（16）ケインズ学会編、平井俊顕監修『危機の中で〈ケインズ〉から学ぶ――資本主義とヴィジョンの再生を目指して――』作品社、二〇一一年、九六頁。

（17）岩井克人「経済学を学ぶことの幸運、日本で経済学を学ぶことの使命」、東京大学経友会『経友』No.206、二〇二二年二月号、五二頁。

（18）岩井克人他『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』東洋経済新報社、二〇二〇年、一四二頁。

（19）同書、二四―五頁。

（20）岩井克人（聞き手＝前田裕之）『経済学の宇宙』日本経済新聞出版社、二〇一五年、四二四頁。

（21）同書、四七〇頁。

（22）岩井克人『貨幣論』筑摩書房、一九九三年、二一四頁。

(23) 岩井克人＋三浦雅士『資本主義から市民主義へ』新書館、二〇〇六年、一六四頁。

(24) じつは、貨幣が貨幣としての価値を支え続けている存立構造そのものが、岩井先生が『貨幣論』でいわれているように、きわめて不安定な「危うい円環」にほかならないのです。「貨幣が今まで貨幣として使われてきたという事実そのものが、貨幣が無限の未来まで使われつづけるというひとびとの期待のとりあえずの根拠となっている」（一九〇頁）からです。貨幣の自己循環論法にもとづく岩井先生のこうした貨幣観は、ケインズのコンヴェンション理論と大きな親近性をもっているといえるでしょう。

【主要参照文献】

岩井克人［一九八五］『ヴェニスの商人の資本論』筑摩書房。

岩井克人［一九八七］『不均衡動学の理論』岩波書店。

岩井克人［一九九〇］「貨幣とは何か」『経済集志』（日本大学経済研究会）、五九巻第四号、一―一三（三五三―三六五）頁。

岩井克人［一九九三］『貨幣論』筑摩書房。

岩井克人［一九九四］『資本主義を語る』講談社。

岩井克人［二〇〇〇］『二十一世紀の資本主義論』筑摩書房。

岩井克人［二〇〇三］『会社はこれからどうなるのか』平凡社。

岩井克人＋三浦雅士［二〇〇六］『資本主義から市民主義へ』新書館。

岩井克人［二〇〇九］『会社はこれからどうなるのか』平凡社ライブラリー。

岩井克人（聞き手＝前田裕之）［二〇一五］『経済学の宇宙』日本経済新聞出版社。

岩井克人＋丸山俊一＋ＮＨＫ「欲望の資本主義」制作班［二〇二〇］『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』東洋経済新報社。

岩井克人（聞き手＝前田裕之）［二〇二一］『経済学の宇宙』（日経ビジネス人文庫）日経ＢＰ・日本経済新聞出版本部。

塚本恭章［二〇二三］『経済学の冒険――ブックレビュー＆ガイド一〇〇』読書人。

付記：本稿の括弧にて扱われている文章は、『欲望の貨幣論』ほか、特段の断りがない限り、岩井先生の著書からの「引用」となります。